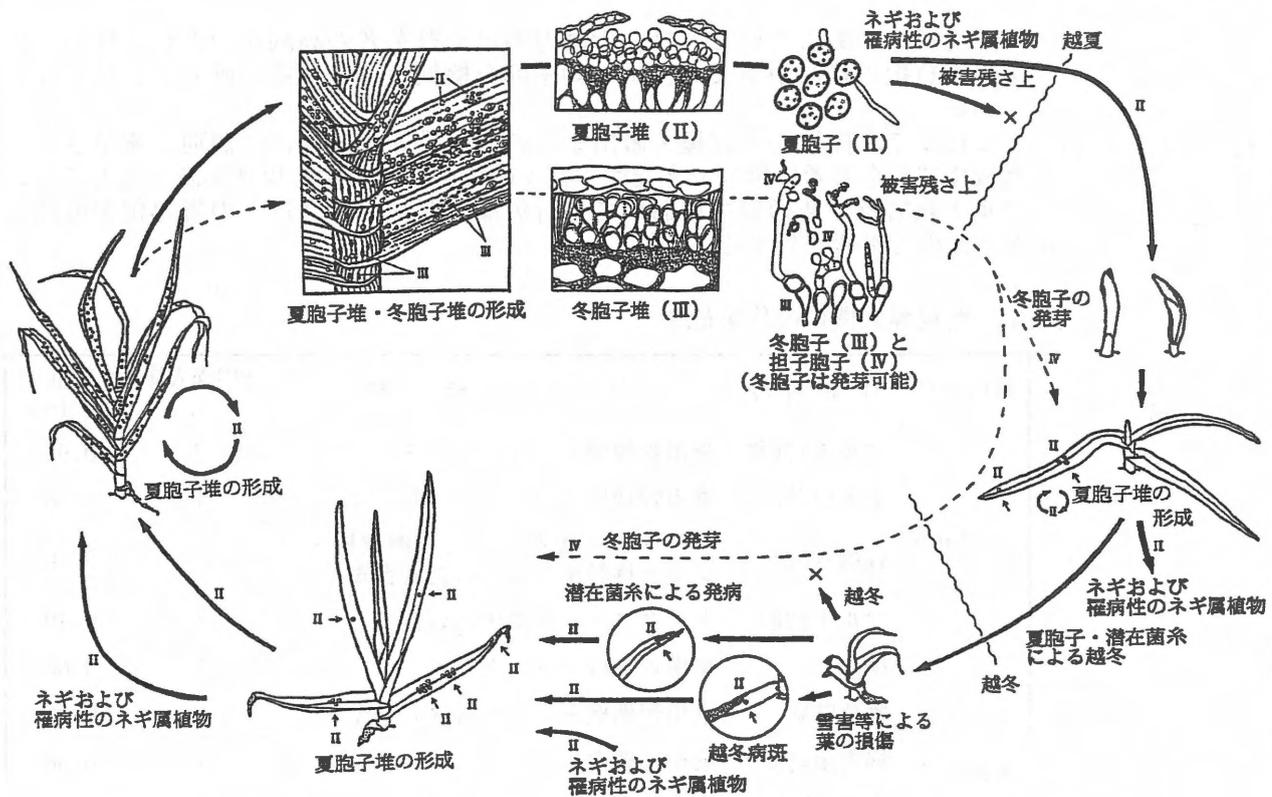


| | | | |
|----------|---|------|------|
| 事項 | ニンニクさび病菌の伝染経路から見た被害軽減対策 | | |
| ねらい | 農作物の病害防除において、病原菌の伝染経路を明らかにすることは、防除対策を講じる上で極めて重要である。そこで、これまで不明な点が多かったニンニクさび病菌の伝染経路を明らかにし、本病の耕種的防除に関する知見を得たので、参考に供する。 | | |
| 指導内容 | <p>1. ニンニクさび病菌の伝染経路の概略</p> <p>1) 夏胞子は夏季の気温下では生存期間が短くなり、にんにく被害残さ上では越夏できない。ねぎ等の生葉上で発生をくり返して越夏した夏胞子が、にんにくで秋季発生を起こす。</p> <p>2) 秋季に、にんにくで発生した夏胞子によるにんにく等への感染・発病は、気温の低下とともに急激に減少する。</p> <p>3) 積雪下や冬季の気温下での越冬は、にんにく等の生葉上の夏胞子と葉中の菌糸によって行われるが、雪害等による損傷の著しい葉では越冬は困難となる。</p> <p>4) 春の第一次発生は主に、にんにく等の生葉上の夏胞子による感染と葉中の菌糸による発病に起因する。その後夏胞子により収穫期までににんにく等で伝染がくり返される。</p> <p>5) 収穫期近くになると、夏胞子のほかに冬胞子も発生してくる。冬胞子にはんにく被害残さ上で越夏・越冬し、低率ながら発芽して秋季～春季発生の伝染源となり得るが、その役割は夏胞子に比べて小さいと考えられる。</p> <p>2. ニンニクさび病菌が寄生できるねぎ類</p> <p>1) 野菜類では、にんにくのほか、ねぎ、たまねぎ等6種類に寄生でき、にら、らっきょう、リーキ等6種類には寄生できない。</p> <p>2) 花き類では、ギカンチューム、シュベルティー等8種類に寄生でき、コワニー、モーリー等4種類には寄生できない。</p> <p>3) 山野草では、アサツキ、ノビル等3種類に寄生でき、ギョウジャニンニク等3種類には寄生できない。</p> <p>3. ニンニクさび病の耕種的防除</p> <p>1) にんにくの極端な早植えによる萌芽・展葉の早期化は、さび病の秋季発生を助長するので、植え付け適期を守るようにする。</p> <p>2) 収穫期を過ぎたねぎを圃場に放置せず、適期内に早めに収穫を済ませるようにする。</p> <p>3) にんにく栽培圃場の付近では、さび病にかかるねぎ類をできるだけ栽培しないようにする。</p> <p>4) 圃場の周辺でアサツキやノビルを見かけたら、刈り取りや抜き取りを行う。</p> | | |
| 期待される効果 | ニンニクさび病菌の伝染経路に基づく耕種的防除が行われ、さび病の被害が軽減される。 | | |
| 利用上の注意事項 | | | |
| 担当 | 青森県農業試験場 環境部 | 対象地域 | 県下全域 |
| 発表文献等 | 平成7、8、9、10年度 青森県農業試験場試験成績概要集 | | |

【根拠となった主要な試験結果】



図一 ニンニクさび病菌の伝染経路

(平成7~10年の青森農試のデータを図に示した。)

注) 時計文字のⅡ、Ⅲ、Ⅳは、ニンニクさび病菌のもつ胞子の種類(世代)を略記したものである。

表一 各種ねぎ類に対するニンニクさび病菌の寄生性

(平成7~10年 青森農試)

| | 寄生できるねぎ類 | 寄生できないねぎ類 |
|-----|---|---|
| 野菜 | にんにく、ねぎ、たまねぎ、わけぎ、やぐらねぎ、アンペロプラスム(無臭にんにく) | にら、らっきょう、リーキ、グレートヘッデッドガーリック、チャイブ、ねぎ類の一種(有臭スーパージャンボニンニク) |
| 花き | アフラチュネンス、オストロスキャナム、ギガンチューム、コエルレウム、シュベルティー、ユニフォルウム、ローゼンバツキャナム、ねぎ類の一種(大輪アリウム) | コワニー、スパエロファラム(丹頂)、トリケトラム、モーリー |
| 山野草 | アサツキ、ノビル、ヒメニラ | ギョウジャニンニク、ねぎの一種(ネグスイセン) ねぎ類の一種(チシマラッキョウ又はミヤマラッキョウ) |

注) ()内は購入時の名称を示す。